

①アンケート調査などからの課題と思われること

- (1) 地域との連携・つながりの希薄化、一人ひとりの地域に対する意識の低下
- (2) 相談体制の充実（窓口の周知、相談される側の体制整備）
- (3) 担い手の減少・高齢化
- (4) 情報共有・情報提供
- (5) 災害・感染症対策

②住民参加のワークショップ参加者アンケートでの自由意見

- (1) **かかわり、つながり**
 - 様々な職種の人と関わっていきたい。若い人、年寄り関係なく仲良くしたい。
 - 播磨町で住む、また働く人すべての人が関わっていけるような町づくり。
 - 心が温かくなる優しい人間関係が築ける町になってほしい。
- (2) **活動への参加**
 - 地域住民が意欲的な人が多い、もっと住民主体の取り組みを増やしたらいい。
 - 地域力の向上で共助に共働を。自分たちができることをもっと話したい。
 - 自治会の枠、役割を越えた活動を促す。
- (3) **見えてこない、声を上げられない人たち**
 - どの世代も困りごとを相談しながら暮らせるようになってほしい。
 - 障がい者の問題や交通の便についての問題が多く見つかった。
 - 声が上がってこない困りごともあるような仕組みがあるといい。
- (4) **しないといけないこと**
 - 分けない、排除しない、取り残さない当事者住民参画。
 - 情報をどれだけ広く共有できるかを重要視してほしい。
 - 助けられる、助ける立場は分断されず、どちらもやれるような仕組みが必要。

③第1回策定委員会での意見交換

- (1) **つながるため、参加するための課題、現状**
 - 顔見知りが多いけど、需要と供給で考えた時の、必要なつながりができていない。
 - 熱意をもってやる人は、疲弊して続かない、活動層の固定化
 - つながりは、家族がいなくなるとどんどんつながりが減る
- (2) **つながるために、参加するために必要なこと**
 - コーディネーターの配置にお金をかける
 - 福祉とは無縁でないことを周知し、参加促進は、どこをターゲットにするか。
 - 具体的な行動指針をだしていく。
- (3) **生きづらさを抱える人へのまなざし**
 - つながれない人、障害を持つ人の意見をすくう必要がある。
 - 誰にでもいつでもどこでも必要な情報が届くように。
 - どうしたらマイノリティの方が生き生きと生活ができるのか。

④策定委員の自由参加のグループワークでの意見

- 事例から見えたこと
- ① **困りごとを抱えている本人・家族の意識**
 - 困っていることを困っていると言える（言いやすい）地域に。
 - 周囲が困っていても当事者が困っていない場合は手が出せない。
 - 自らの意思で孤立している人、気付いたら孤立してしまっている人。
 - ② **当事者を囲む周囲の人の意識**
 - 権利への主張が強くなっているものの、それでも関わっていくことは必要だ。
 - 従前は、地域内での“支え合い・助け合い”を身近に感じたが、福祉サービス等が充実し、専門職化すると、地域と離れてしまった（気にかけてみないと気付かない）。
 - ③ **支援者への負担の増大**
 - おせっかいな人が動きやすい状況にすることも必要。
 - ④ **行政等の関わり**
 - 町全体の安全と個人の安全を両方守っていく必要がある。
 - 制度から漏れ落ちていくことにどうかかわるか。

解決への取り組み

- ①時代に合わせた“つながり”の仕組み②コーディネータの配置③住民を巻き込む

新しい視点

現状は課題の「モグラたたき」状態で、今後加速化することが予測される。事象対応（事後対応）だけでなく事前予防についても考えていく必要がある

・つながりや参加をどうしていくのか

・生きづらさを抱える人やマイノリティの人へのまなざし

・意識の変革と支える土台となる播磨町の文化の醸成

・地域福祉計画の意義と目指す方向（具体的な指針）他